

時刻	次第・発言者	発言内容
9:31	<開会行事> 進行(黒木総括) <開会挨拶> 矢野課長	開会の言葉 令和7年度第1回「地域連携コンソーシアム会議」の開会に当たり、一言御挨拶申し上げます。 委員の皆さまには御多用のところ、本会議に御出席いただき、ありがとうございます。 本県では令和4年度より、文部科学省の委託事業を活用して「生涯を通じた障がい者の学び支援事業」を実施しております。4年目となる今年度も国の採択を受け引き続き事業を実施する運びとなりました。引き続き、皆様の御指導・御協力よろしくお願い申し上げます 本事業は、障がいがある方が学校を卒業した後に仲間と交流したり学んだりできる場づくりを推進するために様々な取組を行い、将来的には誰もが障がいの有無に関わらず、共に学び生きるインクルーシブな社会の実現を目指すものです。 事業の基盤をなすのは本コンソーシアム会議です。社会教育、特別支援教育、障がい福祉分野の関係者のネットワークを構築することで、講師の紹介や「障害平等研修」の実施など県の事業に対して御助言をいただき、様々な情報や課題を共有して新しい取組を生んできました。 大分県教育委員会では、令和7年度から15年度までの9年間を計画期間とした新しい大分県長期教育計画「『教育県大分』創造プラン2025」を本年3月に策定しました。計画の中の1つに「共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進」を掲げており、そのための主な取組として「社会教育施設や民間団体等との連携によるセミナー・公開講座など、高齢者や障がい者の学習機会の充実」を進めることとしています。 事業開始から4年間で積み上げた成果とともに今後の持続可能な取組のあり方を探りながら、「かたろうえ大分」による全県的な広報・啓発や、「学びの拠点」の拡充など、多様なニーズに対応した学習機会を提供していきたいと考えています。 本日の第1回目の会議においては、ねらいが2つございます。 まず委員の皆様に本年度の事業展開案について御意見や御助言をいただくこと、次に委員の皆様のそれぞれの取組や活動について情報共有し、本事業への御協力のかたちや新たな連携の可能性を御教示いただくことです。 委員の皆様には、本事業の推進のため、忌憚のない御意見をいただきますようお願い申し上げます。開会の挨拶といたします。 本日は、どうぞよろしくお願いいたします。
	<座長選出>	座長：岡田委員 副座長：矢野委員を選出
	<協議1>	事務局：令和6年度の事業報告

10 : 20	社会教育課 中野	令和7年度の事業計画案 (新規)・普及啓発:「かたろうえ大分」スマートデバイスへのアイコン登録 ・学びの拠点の拡充及び機能強化:チラシ等での広報及び公民館・特別支援学校出前講座の実施 (休憩)
	<協議2>	県内の取組の現状と課題
	岡田座長	・生涯学習講座をまず知って参加していただくことが大切。今年度は既に受講した方たちのミーティング対応の講座をやりたいと思っている。 ・今のところボランティアであれこれ参加してみたい人や、パソコンの入力をもうちょっとうまくやりたい人を対象にパソコン講座あたりから、生活に役立つ学びみたいなものをこれまで実行された方を中心にしつつ公開講座としても位置付けて広く募集をして展開していきたい。 ・大学でやること自体もやるが、社会参加にどうつなげるか等色々考えながらやりたいと思っている。
	高橋委員	・昨年度は公民館の研修ということでさせていただいた。 ・コンファレンスでファシリテーターをさせていただいたけど、時間がなくて、皆さんの話をもうちょっと聞きだせたらよかったと反省している。 ・公民館のモデル事業が大分市はない。大分市は人数が多く土地が広いのもあるので、地域ごとに特別支援学校と公民館がつながっていけばいいのでは。
	友成委員	・情報提供というのがなかなか難しい。住所、電話番号は分かるが学校としてそれを伝えていくのは個人情報になるので難しい。同窓会を活用するということが、同窓会に来た時に伝えたが、同窓会が1月なのでもうほぼ事業が終わっている。 ・在校生のうちからある程度情報をきちんと共有することが大切。PTA活動の一環でそういったことができないかというところで、今年九州大会の発表があったので進路支援というところで研修はたくさんやったが、少し話を広げてライフキャリアの豊かさというところで社会教育への関心を保護者に持ってもらうというふうにできないかということでPTA活動で事業や団体等の情報交換しながらやってきた。 ・知りたい情報がどこにいけば分かるのか、という意見も出た。今年度は出前講座も参加するが、活動を通して情報も伝えて在学のうちから体験をしていつて卒業後につなげることが大事と思い進めている。
	衛藤委員	・昨年度は行政関係者として特別支援教育課の方から参加していた。 ・大分市内の特別支援学校に勤務していた頃と比べて、日田市内で勤務して子

		どもたちの状況が地域柄というか明らかに違うと感じている。放課後の過ごし方、土日どんなことをしているかも違う。卒業した後の学びの場だったり、余暇活動だったりというのをどういうふうに展開していかなければならないかすごく感じている。 ・日田市では東有田公民館の取組の紹介があったが、隣にある西有田公民館には日常的にやり取りがあり、館長や地域の方とあいさつも当たり前になっている状況で、離れたところではなかなか行きにくいと感じている。 ・卒業生には何が行われているかというのを把握しづらい。 ・今本校で、昨年度卒業した生徒さんが1名勤務している。土日はどうしているか聞くと、疲れてずっと寝ている、余暇活動まで至っていないということなので、情報を知らせてあげたいが彼は情報を得るところがないというような状況なので、卒業生は同じような課題を持っているのかなと感じている。 ・この会で色々な情報共有をし、学校に広げていきたい。
	宮脇委員	・あすびあ大分の施設、教室の説明 ・大切にしたい、こうあったらいいなと思うのは、教室に居ていただける時間はいい時間、楽しい時間にしていただきたいと思う。目的を持ってもらって参加してもらおうといいし、日常生活につながるような何かをプログラムしていければいいなと思っていて、受講者さんに目的に寄り添った形で運営していければという課題も持っている。 ・移動の問題も課題として認識している。新規の方も受け入れたいが、そうなったときに継続で参加されている参加者の方の居場所がどうなるかも課題。
	高窪委員	・障がい者社会参加推進センターの取組の説明 ・普段から色々な相談を受けている。 ・卒業後、作業所や仕事に行くが、他になかなか行く気にならないという相談がある。そんな話があった時、作業所でない居場所があってそのような場が必要になっていくと感じる。 ・第30回「ときめき作品展」の紹介
	石川委員	・自立支援協議会は、障害者総合支援法という法律に基づく協議会。 ・平成19年に設置し宇佐市において様々な学びの事業をしている。 ・芸術文化の予算を受け、年に数回ワークショップを行って展示会まで、吐合委員や芸術文化支援センターのサポートを受けながら実施している。 ・障がい者を事業の対象にしていたので、児童も一緒にやっていきたいということで、児童発達支援センターと協議をして音楽教室で楽器を作成して演奏するという予定がある。 ・余暇支援で課題もあり、今年度はより生活実態に役に立つ事業ということで、スマートフォンを扱ったり、スポーツ系に取り組んだりしようと企画している。 ・障がいの分野から情報発信していることが多いので、今年度は市の社会教育課の総括にも入っていただいて、公民館活動等連携していければいいと思い協

	隅田委員	議しているところ。 ・コンソーシアムの取組「青少年の家ワンデイキャンプ」だが、青少年の家の職員と通所事業所の方との関係で終わってしまうので、地域住民の方や大学のボランティアさんとかそういった方々とうまく関わり合いながら実施できたらいいと思う。 ・ユニバーサルカレッジは非常によい活動だと思っている。この好事例的な取組を県内でどのように横展開していくかが今後の課題。 ・教育委員会の事業だけでやっていくのは限界があるので、以前から出てきた地域活動支援センターの活用というところがあると思うので、事業所や福祉的就労の事業が終わった後、そういったところの過ごし方、土日の過ごし方を地域と教育とどうコラボして活動していくかということが持続可能な取組になると感じている。 ・障がい者の芸術文化を支援する、文字通りの事をしている。 ・令和元年11月に設置し、県の委託事業。 ・報告書の紹介、事業説明 ・相談支援、創造機会、製作の機会の提供、発表する機会、鑑賞する機会、人材育成、公共事業を行っている。 ・「オープンアトリエ」について。OPAMのアトリエで創作活動を行うという機会を提供した。昨日6月8日に実施したが盛況だった。毎回満員になり断る方もいる。好きな画材を選んで創作活動をし、アドバイザーとして専門家の方に来ていただいて活動をしている。中には、この活動の中から工務店、全国規模の工務店に入所されている方やOPAMの中の障がい者の方の芸術作品を展示するスペースに展示する方もいる。 ・「アート体験活動」という、県内の特別支援学校、福祉施設、事業所などに専門家を派遣しアート活動を体験していただくという取組もあり、非常に人気がある。今年度5倍の申し込みがあった。 ・日出町でも「オープンアトリエ」を実施し、できるだけ地域の方に出て行ってほしいということで開催する。 ・7月22日、「新感覚コンサート」を開催する。様々な鑑賞支援を行い、じっと黙って座って聴いていなければいけないというコンサートではなく、どなたでも参加できますという思考のコンサートを年1回開催している。 ・様々な事業を企画し、障がい者の方の芸術文化を支援している。 <td data-bbox="229 1720 456 2101">吐合委員</td> <td data-bbox="456 1720 1497 2101"> ・「元気の出るアート！」パンフレット（チラシ）の説明 ・昨年度は24名の作家のチラシを配ったが、他にどんな作品があるのか問合せがあったので、今回は一人の作品が分かるように作った。ファイルには他の支援センターのチラシや障がいのある方に関するチラシを入れてお渡しするつもりで作った。予算は赤い羽根のお金で作った。 ・元気の出るアート！は今年で20年。元々お金がないので補助をいただいてやっている。 ・とにかく多くの方に作品を見ていただきたい。その作品を見ることで、本人 </td>	吐合委員	・「元気の出るアート！」パンフレット（チラシ）の説明 ・昨年度は24名の作家のチラシを配ったが、他にどんな作品があるのか問合せがあったので、今回は一人の作品が分かるように作った。ファイルには他の支援センターのチラシや障がいのある方に関するチラシを入れてお渡しするつもりで作った。予算は赤い羽根のお金で作った。 ・元気の出るアート！は今年で20年。元々お金がないので補助をいただいてやっている。 ・とにかく多くの方に作品を見ていただきたい。その作品を見ることで、本人
--	------	---	------	---

	伊達俊委員	たちは社会につながりができるし、お子さんをお持ちのお母さんは、目標ができたという話もいただいている。 ・サードステージ的な教室だが、臼杵のすくらむでは年間120～130回講座を実施している。ルポーズもあすぴあも支援センターも色々やっているが、足りない。特に支援センターは満杯の事が多くお断りしている。施設支援に関しても40～50件申込があつて、いけるのは10数回。それだけニーズがあるけど行けない。予算的なものもあるが、それに対応できる人もいない。あすぴあの教室は別府からタクシーに乗って行っている方、臼杵の教室は保戸島から船とJRに乗ってくるという方もいる。なのでもっと増えたらいいなと思う。 ・定期的に月1回でもいいので、年間通じて毎月何曜日にはここで何があっているというのがあると、本人もご家族も居場所ができる。 ・臼杵の「さぽーとセンター風車」で教室を始めたきっかけは、実は障がい当事者の方が公民館の教室に行ったけど居場所がなかったということがあり。まずは障がいの方でも臼杵の教室は障がいに関わらず誰が来てもいいというのが前面である。 ・本当に目指すところは、公民館であつたり一般の方と一緒にできる、そして障がいの方がいてそれをフォローできるスタッフがいてそれを温かい目で見ただけなのというのが目指すところ。公民館や図書館でももう少し増えたらいい。これだけ人がいてこれだけ施設があつてできていないのは残念。 ・精神疾患、障がいの方がこの治療目的で精神科病院で始めた。 ・ソーシャルフットボールというがバスケットボールやバレーボールもある。 ・モデルとして、昨年度1年間中津支援学校で出前講座を一昨年度やったものと同じような形でやらせていただいた。保護者会をし、特別支援学校の方は5名選手として余暇活動の一環で参加している。 ・週に1回の練習と県外の遠征で一緒に車に乗ったり朝早く起きたりする中で、勉強もそうだが生きていく力を学ぶ。はしの使い方や他者と何かあったときの言葉の使い方など、それが彼らにとっての学びなのかなと思う中で、こういった事業をモデルにさせていただいた出前講座でとてもよかったなと思っている。学生は在学中なので、特別支援学校の先生と中津市の職員の方に協力的にさせていただいて感謝している。 ・卒業後にどう生きていくかというのは、当事者だけでは難しいので、その中で支援者といかに関わりをもっていくかが事業を進めていく上で重要。当事者の個人間でスムーズにやり取りできているならこういった事業は存在しないと思っている。周りの人たちの支援は、いかにその方たちを全体でサポートして、本人が学び自立していくところをいかに提唱していくかというのが課題と思っている。こういった事業をモデルにして、これを民間がこの事業が終わった後継続してやれるかが本当の力かなと思うので継続してやっていきたい。
	西本委員	・スペシャル・オリンピックス大分 パンフレットを使って事業説明。 ・知的障がいのある方が色々なスポーツをやって社会参加ができている。現在

		60 人くらい会員がいる。1 人が3 つも4 つも参加している。月1 回だからほとんど毎月どこかに参加している状況。全国大会もある。今年スピードスケートの世界大会に1 人参加し、3 種目で金銀3 つメダルを取った。 ・課題としては、参加者をいかに増やすか、参加者がほぼ3 0 ～4 0 歳代の方なので若い方に入ってもらいたく小学校の特別支援学級の生徒さんに参加してもらおうとしている。学校にPR している。後は指導者を増やしていきたい。
	池上委員	・自立支援センターおおいたの説明。 ・障がい当事者として、特別支援学校に通っている生徒さんであったり保護者であったりに地域に出て自分らしい生活ができるというのをお伝えできればと思っている。 ・自立支援センターおおいたは、重度の障がいがあっても、地域で成立した生活ができるように支援をし、そういう形が外に出れるような働きかけをしている。まだまだ障がいがある方たちと関わりを持とうとしているけどそういう関わりがまだまだ少ないというところもあるので、こういう会議であったり生涯教育に関わる皆さんのお力を借りて色々な方と少しでも関わり合いを持てるように色々動いていけたらと思っている。 ・イベント等活動をしているので、情報共有しながら色々な関わりを持ってより良い社会であったり、社会に出たとき楽しい未来であったり、過ごし方や生活が見ていけるのかなというのを色々発信していけたらと思う。
	矢野委員	・事務局の立場で3 年間事業を終えて、そこの中から見えた課題について。色々なプログラムで広がりを見せつつあるけれど、プログラムによっては参加者が集まらなかった、そこをどうするかという部分。これは昨年度の第3 回のこの会議で実際にそのプログラムのチラシを見てグループ協議で話をして、ここが参加対象者には分かりにくい、気持ちを前向きに持っていくような仕掛けが足りないとか色々なご意見をいただいた。その辺を含めて4 年目を迎えて一人でも多くの方が参加していただけるプログラムを作っていくことが大事だと考えている。 ・全県的な広がりという部分で、社会教育といえば地域の拠点、公民館を中心に、県内どの地域に住んでいても学ぶ場所がある、交流できる場所があるというのが理想の形だと思うので、それに向けてお知恵をお借りしたい。 ・ホームページ「かたろうえ大分」を作っているが、認知度が不足しているというふうに思うので、ぜひアピールを一緒にやっていただきたい。
	馬場委員	・県立図書館は「いつでも」「誰でも」「どこからでも」という3 つの言葉をキーワードに様々な取組を進めている。この事業については「誰でも」、「どこからでも」というのが重要になってくると思っている。 ・図書館に来られない人に対しては図書館の方から本を届けるというふうに見せようというところがある。 ・課題が色々あり、県立図書館中心に障がいを持っている方でも読みやすいような大活字本であるとか布絵本だとか音声で補助をするような読書の機器を用

		意している。ただ単価が高くて、それによって市町村の図書館でなかなかそれを導入できないという問題がある。県立図書館では、まとまった数を例えば3か月間、障がいを持った方でも楽しめるような読書キットを今後貸出に向けた取組を行っているところ。 ・市町村で配備できないので県図書の方で頑張っているが、なかなか利用数が伸びない。広報が足りないという部分もあると思うし、単価の話もあるが持っていることに魅力がまだないのではというようなところもある。そうだからといって、費用対効果から考えて避けようというのはあり得ないということで、県図書が力を入れていくところとして、読書を通じた障がい者サービスを進めていくところはやっていきたい。事業者や様々な機関で読書活動をやりたいという希望があれば、連絡をいただければまとまった数をお貸しする。気軽に利用していただけると有り難い。
	伊達洋委員	・今年度「特別支援教育推進プラン2025」というものを出し、今年度末にその基本方針として、障がいのある子どもの自立や社会参加に向け、一人一人の教育的ニーズに応じた学びを保障し、共に学び支え合う共生社会へつながるための教育システムの実現を目指すというふうな基本方針を進めている。 ・一般就労を3年間担当しており、保護者向け講演会を行っている。一般就労した保護者に仕事を続ける上で必要なことは何か聞くと、やはり規則正しい生活が一番にくる。意外と多かったのは、余暇活動が充実するというのが2番目。やはり働くための人生じゃなくて、余暇を充実させるために働いているというふうに子どもたちが感じられるようにしないと続けられない。3番目に、なるほどなと思ったが、色々な意味で頼りになる存在の方がいる職場ということも挙げていた。一人でできることできないこと等限界があるのか、その中でどうやって自分の人生を豊かにするのかということ保護者は感じているようだ。なので、卒業後の生涯学習というところに対して我々に何ができるかを考えていきたい。 ・教育委員会だけでもたくさん学校にチラシを配っており埋没している可能性が高いのではと思っている。先日、附属特別支援学校のPTA会長が発表した中で、どうしてもPTA活動の中で就労に対しての活動によりすぎているのではというところで、ライフキャリアのことで横活動を並行して発信しなくちゃいけないという話をした。 ・サカたのを立ち上げたときのメンバーの一人で、当時いたような子が資料の写真に出てくる。ということは、ずっと参加しているということ。また、同じ方が違う写真に出てたりするので、違う活動に参加しているなど。ということは、多分重なりのある方が結構いるんだろうと感じる。多分参加している人は必要感とか充実感を感じて続けているということになるのかと思うので一歩を踏み出すのが大事で、その基盤になっているのは地域だと思うので、色々なチームでやれるといいのですが、なかなか難しいのだろうなと思っている。
	黒川委員	・中津市生涯学習センターのまなびばの取組を報告書を見て初めて知った。令和5年度から取り組んでいるということで、もうちょっと早く知っていれば広

11 : 25	神田委員 佐藤信委員 <議題 3、4> 岡田座長 吐合委員	報当で協力できたのではない。事業のきっかけが障がい児・者支援活動の事業「てくてく」を参考に展開した。楽しみにされている方がいて非常にいい試みだと思っている。 ・「てくてく」という事業は最初は障がい児を対象にして特に特別支援学校と協力しながら事業展開を進めていった。特別支援学校で利用した方が成長して大人になっても参加している。中津市の社会福祉協議会の委託でやっている。事業を組み立てているのは障がい当事者の団体、発達障がい児支援者の親子会「たんぽぽ」の保護者が担っている。保護者の繋がりもあって。「てくてく」は根強い人気がある。 ・精神障がい者の家族の会。協会が直接何か活動をしているということではなくて、スポーツ、文化の支援をしている。芸術は、社会参加推進協議会への出展を働きかけている。 ・色々な講座や何かが開かれたとき、参加者が多いということだが、精神障がい者がどれだけ参加しているかは知らない。身の回りはなかなか参加できない方たちが多い。余暇活動として芸術文化やスポーツに参加していただきたい時は施設にお願いする形になる。 ・スポーツにおいても、あまり障がいに関係なかったりするのではないかと思いますので、精神障がいの方も一緒に指導していただければと思う。 ・各施設の職員に協力を仰ぐというと、日常業務もありながら、余暇も支援をするのは無理があると思うので、なかなかそういう活動が起こせないという事情がある。 ・報告書を見ても、県南の市町村があまり入っていないので、もうちょっと福祉と教育の連携を働きかける方がいないといけないと思っている。 ・まだまだ県下各市町村が同じような体制で取り組まれているとは言えないと思うので、同じような活動があってどこでも参加できるというふうに早くなっていくといいなと思う。 ・今年で結成して63年。 ・今までの課題は、神田先生が言われた「精神障がい」という言葉を「知的障がい」という言葉に置きかえていただければ同じ課題を抱えている。 ・何らかアクションを起こすという考えがある。 ・残りの話題である未実施地域への普及であったり、コンソーシアム委員のネットワーク強化について、できているのは一部の地域であったり、一部の人。1つプログラムに参加しているけど他のは参加していない。他の活動につながっていくかということも含めて。大分大学の生涯学習講座も年間で数回なので、そういったところもお互いに組んでやるというふうなところも開発していかなければいけない、もっと広げていくために、もっとつながりながらやっていくためにというところでご提案やご意見をいただければと思う。 ・各施設、福祉施設、どんな活動をしていますとか教育委員会としてアンケ
---------	--	---

		ートを取ったらいいいのでは。教育と福祉の連携がずっとできていないので、連携が必要。
	岡田座長	・実際にどのくらい参加されているのかということでもアンケートで調査を行うというの必要。 ・教育と福祉でどういうふうにやるとうまく一緒できるのかみたいなポイントに対しても事例を共有していく。 ・ゼロからするのではなくて、プログラムをどうやって作って運営していけばいいのかみたいな事に関する情報共有の仕組みをつくる。
	馬場委員	・3年前に全県的にアンケートをとってどんな課題があるかとか、どんなニーズがあるかというのをやった。年数が経っているのも、同じような規模でやるのか、焦点化したアンケートをとるのかというような最新のデータをとる方がよい。
	岡田座長	・今日の発言を聞いて、宇佐市を見に行こうとか、あすぴあさんと組ませてもらおうとか個人的には作戦を立てているところ。一緒する中で今までやれなかったことができるようになってくるとかメリットを感じる一緒の仕方をコンソーシアムの中で増やしていきたいと思っている。
	石川委員	・アンケートは3年前に実証されているということで、各事業所はもちろん地域にお住まいの方とか障がい・種別を超えて出会いとか学びあいとかそういう活動の調査をやっていくと。自立支援協議会が18市町村だけど17か所あるので、そこに具体的に学びというとなかなか難しいので余暇をどういったことをやっていますかというところをいいかなと思う。
	馬場委員	・3年前のアンケートの件だが、当時事務局にいて、何も分からない中で手探りで誰に聞けばいいのかどうつなげていいのか分からない中取ったアンケート。4年目のコンソーシアムになったら石川さんが言われたみたいどこに行けばいいのか、どういう人たちの意見を聞けばいいのかというのがだいぶ見えてきたと思うので、今年度、今後の形になるのかを事務局として検討していただけると有り難いと思う。
	岡田座長	・障がいのある方の機会が例えば5倍っていうのはもういっぱいなかなか申し込んでも当たらないとなる現実のところもある。もっと違うところで言うと、障がいのある人と障がいのない人が一緒に学べる機会みたいなところもまだまだこれ経験不足で一緒する。そういうふうなプログラムを作っているところも少ないし、その意味ではまだまだ開拓をしていかなければいけないところはあちこちある。 ・インクルーシブと一緒に学べる場を作る時にどういうふうなことを考えて、どういうふうな経路で声かけをしていけばいいのかというのは、いいやり方みたいなものを情報共有していけばいいと思う。

	事務局	・ここを出していただいたアイデアであったり、課題についてしっかり継続的に協議し、具体的な取組につなげていって、結果的に地域で障がい者や色々な人が一緒に学べる場の充実に具体的に前に進んでいるという感じでコンソーシアム会議でも検討していきたい。 ・会議に出るだけでなくここでつながって一緒に活動する部分も充実させたい。
	閉会行事 課長	貴重なご意見をいただいて感謝申し上げます。今日いただいたご意見を今年度の事業に反映できるのではないのかこの辺も整備していきたいです。 みなさん本当にありがとうございます。
	事務局	以上をもちまして、第1回地域連携コンソーシアム会議を終了いたします。
	事務連絡	・オピニオンシートをお願い ・第2回会議は10月下旬。その前に知恵を出し合う場も設けたい。

<意見・提案のまとめ>

- ・情報提供の難しさ（個人情報等で）
- ・講座を実施しているが、応募者多数で参加できない方がいたり、新規の方を受け入れると今までの受講者の居場所の確保が難しくなったりする。
- ・定期的に講座を実施し、居場所作りを確保する。
- ・県内に同じような活動があってもどこでも参加できるというふうになるとよい。
- ・教育と福祉の連携。
- ・未実施地域への普及は焦点化したアンケートをとるとよいのでは。
- ・会議に出るだけでなく、ここで繋がって一緒に活動をする部分を充実させたい。